



Title	マカオのポルトガル人子孫（マカエンセ）のエスニシ ティの現状：マカエンセ世界集会のフィールドワー クから
Author(s)	内藤, 理佳
Citation	Anais : Coloquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2020, 48, p. 61-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78956
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マカオのポルトガル人子孫（マカエンセ）の エスニシティの現状 ーマカエンセ世界集会のフィールドワークから¹

内藤理佳

1. はじめにーマカオとマカエンセの歴史

16世紀前半、ゴアやマラッカなど東南アジア諸地域を支配下に置いたポルトガルは、次に中国（明）との対等な立場での交易を希望したが、交渉に失敗し、以後明との密貿易を継続させるため中国沿岸各地を転々とした結果、広東地方の小さな漁村マカオに辿り着いた²。ポルトガル人はマカオ当局への地租の支払いによって居住を許可され1557年頃から定住を開始し、以後事実上の植民地統治を行ない、マカオは極東貿易ならびにキリスト教布教の根拠地として繁栄した。そしてポルトガルの現地婚政策に基づき、現地生まれのポルトガル人、すなわちマカエンセ（macaense）と呼ばれる人々のコミュニティが形成された。

1639年の日本鎖国によって貿易と布教活動の両面で大打撃を受けたマカオは急速に衰退した。18世紀半ば、中国（清）とヨーロッパ諸国間の貿易拠点としてマカオが利用されたことで一時的な再繁栄期が訪れたものの、アヘン戦争(1840-42年)後の南京条約により香港が開港し貿易港として発展するとともに、マカオは再び衰退していった。

¹ 本稿は2017年度日本ポルトガル・ブラジル学会における口頭発表をもとに、加筆修正を行なったものである。

² ポルトガル人来航以前のマカオは「牡蠣の取れる静かな海」を表す「濠鏡」「蠔鏡」と呼ばれていた。現在マカオを指す中国語の地名「澳門」はマカオの港（澳）の南北にある二つの丘が「門」のようにそびえていることから呼ばれた俗称で、明朝時代にはすでに用いられていた〔東光 1998 : 9〕。マカオ(Macau)という名称の起源は史料には残されていないが、最初にマカオに到着したポルトガル人たちがマカオ最南端にある道教寺院、媽閣廟近くの浅瀬に上陸し、現地住民にその場所の地名を尋ねた際、言葉が通じなかったために住民が媽閣廟の名称を尋ねられたと思い広東語で「マッコウミウ」と返答したことから「マカオ」という地名に変わっていったという説が広く信じられている。

1845 年、ポルトガルは欧米列強諸国に歩みを合わせ、マカオにおける植民地支配システムの強化を狙い、約 3 世紀に渡って継続してきたマカオへの地租支払いを一方的に停止した。さらに 1887 年、葡清友好通商条約が締結され、中国側の関与を認めるという条件下、ポルトガルにマカオ行政権が与えられることとなった。

ポルトガル領となったマカオにおいて、支配階級として本国から赴任するポルトガル人は現地の言葉である中国語（広東語）を理解しようとしなかった。いっぽう、マカオ人口の九割以上を占める一般中国人住民に対するポルトガル語教育もほとんど行われなかったため、両者の間には言語上の大きな障壁が存在した。こうした社会体制の中で、ポルトガル語を母語とし、中国語（広東語）の会話に堪能なマカエンセがポルトガル人と中国人との間の緩衝材の役割を果たした。マカエンセは現地に派遣されるポルトガル人との婚姻や業務遂行における忠誠を通してポルトガル人コミュニティとの紐帯を強め、中級公務員職を独占し、準支配階級として優遇された立場を享受していった。

20 世紀に入ると、ポルトガルと中国で大きな社会変動や政変が続いた。ポルトガルでは、1910 年のポルトガル共和革命によって王政が廃止された後、共和制が開始したが国内は混乱し、その状況を收拾する形で 1932 年にサラザール独裁体制が確立した。いっぽう中国では 1912 年に中華民国が成立し、その後 1937 年に盧溝橋事件を皮切りに日中戦争が勃発し太平洋戦争へと進んでいった。終戦後、1949 年に中華人民共和国が成立した。

1966 年 12 月 3 日、のちに「一・二・三事件」の名で知られることとなる事件が勃発した。中国文化大革命の影響を受け、中国人住民が組織した反ポルトガル闘争のデモ隊が暴徒化して混乱が 3 日間続き、結局死者・負傷者 200 名以上が出る騒ぎとなった〔塩出 1999: 142-144〕。マカオ政府は自力でデモを鎮圧することに失敗し、中国共産党の力を借りてようやく事態を收拾することができた。この事件以降、マカオにおける中国の影響力が拡大し、事実上、中国政府の先導による中国返還までのタイムスケジュールが刻々と刻まれていく。

1974 年のポルトガル民主革命によって植民地主義に終止符が打たれると、翌年、ポルトガルは中華人民共和国を承認し、1979 年、中国とポルトガルは国交を樹立した。その際にマカオが中国領であるこ

とが両政府間で確認され、さらに 1987 年の中葡共同声明によって 12 年後のマカオ中国返還が宣言された。

1999 年 12 月 20 日、マカオは中国特別行政区として新しい社会体制をスタートさせ、中国語とポルトガル語が公用語となった³。返還前、マカオの唯一の公用語であったポルトガル語を母語として生まれ育ったマカエンセの多くは、生活言語として広東語を「話す」ことは堪能でも中国語の「読み書き」を学んでおらず、中国特別行政区として中国語を第一言語とする新体制の中で、それまで公務員社会で特権を得てきたマカエンセの社会的地位は失墜していった。

2. マカエンセの移民史

現在、世界各地に暮らすマカエンセの総数は数万人と見積もられ⁴、うちマカオ居住者は約 8 千人強⁵で、マカオ以外の地域に居住するマカエンセのほうが多数派である。こうした現状は、1840 年代から 20 世紀末まで、さまざまな歴史的背景から多数のマカエンセがディアスポラ（海外移民）の道を選んだことに起因する。マカエンセの移民史は大きく三段階に分けることができる。

1) 香港と上海への移民（1840 年代前半～1940 年代前半）

南京条約によって香港島がイギリスに割譲された結果、ヨーロッパ諸国は対中国貿易の拠点をマカオよりも良港である香港に移設した。それとともに、これらのヨーロッパ系企業に勤務していた多くのマカエンセの職員が仕事を求め香港へ渡った。いっぽう、香港と同じく南京条約によって開港し、1840 年代末に国際都市として急激に発展し

³ 1999 年 12 月 20 日に発効されたマカオ特別行政区基本法第 9 条には「マカオ特別行政区の行政・立法・司法機関において、中国語以外にポルトガル語も公用語として使用可能とする（*Além da língua chinesa, pode usar-se também a língua portuguesa nos órgãos executivo, legislativo e judiciais da Região Administrativa Especial de Macau, sendo também o português língua oficial.*）」と記載されている。ここで示されている「中国語」が中国の公用語である標準語を指すのか、マカオ現地で話されている広東語のみを指すのかは明記されていない。

⁴ 世界に散在するマカエンセの総数に関する統計は存在せず、研究者によって 2 万人～15 万人と大きな幅がある。

⁵ 現在入手できる最新のエスニシティ別人口統計は 2011 年のもので、総人口 552,503 人のうち、ポルトガル系と申告した住民の総数は 8,106 人であった。

た上海にも多数のマカエンセが移民した。

かつて国際貿易の拠点として機能していたマカオで、おもに中国人とポルトガル人の血を引く家族のもとで生まれ育ったマカエンセには語学堪能な者が多く、その仕事能力と勤勉さが高く評価されながらも、昇進においてはイギリスをはじめとする当時の先進国出身者とは同等に扱われず、管理職への道も閉ざされていた [Silva 2015:95, 135]。周囲からは「ポルトガル人」(Portuguese)と呼ばれていたマカエンセ・コミュニティは拡大し、両都市に計約 6 千人のマカエンセが住んでいた。

1941 年 12 月 8 日、日本の真珠湾攻撃に始まる第二次世界大戦の勃発とともに香港は日本に占領された。第三国人とみなされた中立国ポルトガル国籍のマカエンセにはマカオ総督から救いの手が差し伸べられ、戦時中香港からマカオに逃れたマカエンセは約 2500 名であった [Andrade de Sá, 1999:143]。いっぽう上海ではポルトガル人をマカオに移動させる措置は取られなかった。

第二次世界大戦が終結し、両都市では欧米企業や銀行が営業を開始し、戦前同様、語学力と事務能力を兼ね備えるマカエンセは仕事を獲得する者が多かったが、平穏な生活は長く続かなかった。上海では中国の第二次国共内戦が始まり、国民党による上海接収により約一世紀にわたった租界はその歴史を終え、上海のマカエンセのほとんどは多くの家財を失ったまま、マカオに戻るか香港に一時的に滞在したのち、おもにアメリカやカナダなどの英語圏に移住した [Silva 2012:109-120]。

いっぽう、香港でも 1956 年、中華民国の記念日を祝う青天白日旗の撤去をめぐる暴動が勃発し、今後共産党の影響を受けることを懸念した香港在住の多数のマカエンセが安住の地を求めてディアスポラの道を選び、1950 年代後半に移民国アメリカへと移住していった。

2) 文化大革命期の移民(1960 年代～1970 年代)

中国文化大革命の影響を受けた前述の「一・二・三事件」をきっかけに、将来の生活を憂慮したマカエンセの第二の海外移民の波が起こった。おもな行先はポルトガル国籍者として移民手続きが簡便に住むポルトガルとブラジル、そして移民を広く受け入れていた英語圏のオーストラリア、カナダ、アメリカ、イギリスであった。

実は、この事件の際、事態の收拾を困難と見たポルトガルはマカオを放棄する意思を中国側に提示していた。しかし、文化大革命による

国内の権力闘争の中で、次期尚早とみた中国側はマカオの即時返還を断った〔Fernandes 2006:198-199〕。その後、マカオの中国返還交渉は水面下で進められ、1979年ポルトガルと中華人民共和国の国交樹立の際にはマカオの主権は中国に属することが確認されていたが、その合意は1987年の中葡共同声明まで公表されることはなかった〔塩出1999:149〕ため、それまで一般住民にはマカオがポルトガルの手を離れることは知らされていなかった。

3) 中葡共同声明発表（1987年）以降

第三のマカエンセの海外移民の波は、1987年中葡共同声明によって12年後のマカオ中国返還が公表された後に発生した。同声明では、返還後、香港同様一国二制度の方針が50年間維持されることが公式に明示された。その後、1993年に発表された特別行政区マカオの憲法に相当するマカオ基本法において、返還後のマカエンセのポルトガル国籍の保持を含むポルトガルのアイデンティティの保護が約束された。

しかし、マカオが強力な共産主義国家である中国に吸収されることは、マカオ在住マカエンセの不安をあおった。彼らの多くは中級公務員として働いており、返還後そのまま働き続けることができると言われていたが、それまでポルトガル人が占めていた管理職のポストが中国人に取って代わることは明らかであり、給与や待遇などが現状維持のままであるという保証は明言されなかった。そこで、返還前に早期退職をし、すべての財産を抱えて海外移住するマカエンセが続出した。マカオに残留することを決めたマカエンセたちも、ポルトガルやマカエンセ・コミュニティが存在する国や地域に物件を購入しておき、いつでもマカオを脱出する準備をしていた者が多かったという⁶。

結局、1999年12月20日のマカオ中国返還以降、今日の現状から知られるように、マカエンセの生活は大きく脅かされることはなかった。逆に、長年にわたり現地の独占資本が牛耳ってきたカジノ産業が2002年に解禁されたことにより、アメリカや香港から資本が流入し、賭博業による収入が数年間でラスベガスを凌駕して右肩上がりの経済発展を遂げ、現在、マカオ市民は豊かな生活を享受している。そのため、この時期にディアスポラとなったマカエンセの中には、退職後の公務

⁶ 筆者が2008～2015年に実施した聞き取り調査より得たコメント。

員職への復帰は望めないものの、移住先の国の経済状況の悪化などに伴いマカオに再び戻ってくる者も増加しているという⁷。

3. カーザ・デ・マカオ（Casa de Macau）の設立

これまで見てきたように、ディアスポラとなったマカエンセが集中した移住先として、広東語圏では香港、英語圏ではオーストラリア、アメリカ合衆国、カナダ、ポルトガル語圏ではポルトガルおよびブラジルが挙げられる。これらの国や地域には日本の県人会組織に似た組織が結成され、おもにカーザ・デ・マカオ（Casa de Macau, 以後便宜上「県人会」と記載する）と名付けられている。

	国名	都市名	名称	会員人数	設立
1	カナダ	トロント	カーザ・デ・マカオ Casa de Macau no Canadá	221	1995
2	カナダ	トロント	マカオ・クラブ Macao Club Inc.	350	1993
3	カナダ	バンクーバー	カーザ・デ・マカオ Casa de Macau Club	150	1995
4	カナダ	バンクーバー	マカオ・カルチュラル・アソシエーション Macao Cultural Association of Western Canada	115	1989
5	アメリカ合衆国	コンコード (サンフランシスコ郊外)	カーザ・デ・マカオ Casa de Macau USA Inc.	257	1995
6	アメリカ合衆国	サンフランシスコ	ルジターノ・クラブ Lusitano Club of California	850 over	1984
7	アメリカ合衆国	ウォールナットクリーク (サンフランシスコ郊外)	ユニオン・マカエンセ・アメリカーナ União Macaense Americana, Inc.	550	1959
8	オーストラリア	シドニー	カーザ・デ・マカオ Casa de Macau Inc.	450	1990年代前半
9	イギリス	ノーザンプトン (イギリス中東部)	マカオ・ハウス UK Macau House	70	2015
10	中国 (特別行政区)	香港	クラブ・ルジターノ Club Lusitano de Hong Kong	500	1866
11	ブラジル	リオデジャネイロ	カーザ・デ・マカオ Casa de Macau do Rio de Janeiro	100	1991
12	ブラジル	サンパウロ	カーザ・デ・マカオ Associação da Casa de Macau	179	1989
13	ポルトガル	リスボン	カーザ・デ・マカオ Casa de Macau em Portugal	400	1967
			総計	4192	

表1 マカオ以外の国・地域のマカエンセ県人会組織

同組織は現在世界7カ国（オーストラリア、アメリカ合衆国、カナダ、中国特別行政区香港、ポルトガル、ブラジル、イギリス）13か所に設置されており、総会員数は4千人強である⁸。最も古い歴史を持つのは1866年に創設された香港のクラブ・ルジターノで、2016年に創

⁷ 筆者が2008～2015年に実施した聞き取り調査より得たコメント。

⁸ 2017年6月現在。

設 150 周年を迎えた。最も新しい県人会は、イギリス中東部・ノザンプトンに 2015 年に創設されたマカオ・ハウスである。

大多数の県人会がインターネット上で URL を持ち、頻繁に更新して活動内容を一般公開している。主な活動としては、マカオと同様中国式・ポルトガル式の年中行事や会員の誕生日会などの会員同士の交流、若い世代のマカエンセへの奨学金制度の設置、マカオやポルトガルの最新ニュースやマカエンセの歴史や伝統の紹介やマカオ関連書籍の出版情報の提供などが挙げられる。当初は各県人会間の交流はほとんどなかったが、返還後、後述するマカエンセ世界集会が定期化するようになってから各県人会のトップが集まり、在マカオのマカエンセ関連協会との会合を行ない、世界レベルでのコミュニティの協力体制の必要性が指摘されるようになってきている。

4. マカエンセ・コミュニティ世界集会（エンコントロ）

1) エンコントロの開設と意義

マカオの中国返還 2 年後直前の 2001 年 11 月 27 日～30 日、マカエンセ関連団体の中で最も古い歴史を持つマカエンセ教育推進協会（APIM – Associação Promotora da Instrução dos Macaenses, 1871 年創設）が中心となって海外のマカエンセ県人会組織と連携し、ディアスポラのマカエンセとマカオ在住マカエンセとの交流を深める目的で、第一回マカエンセ・コミュニティ世界集会が開催された。正式名称は「マカオ 2001 新千年紀マカエンセ・コミュニティ世界大会」（Encontro das comunidades Macaenses do Novo Milénio “Macau 2001”）で、「マカオ - 我々の土地、我々の街、我々の文化」（“Macau – nossa Terra, nossa Cidade, nossa Cultura”）をテーマとし、マカオ内外から約 400 名が参加した。開会式にはポルトガル大統領夫人、在外ポルトガル人共同体担当大臣、エドムンド・ホー（何厚鐸）初代マカオ行政長官らが主賓として招かれた。会期中には昼食会、夕食会、討論会、講演会、市内観光、書籍出版、レセプションなどの行事が開催され、世界中に散らばるマカエンセたちの交流が行なわれるとともに、県人会組織を基盤としたディアスポラのコミュニティとマカオ在住マカエンセ・コミュニティの「絆」を深める必要性が確認された。以後、同集会は 3 年ごとに開催されるようになり、コミュニティの中では「エンコントロ」（Encontro）の名称が一般的に普及するようになった。また、一般のエンコントロとは

別に、若い世代のマカエンセを対象としたマカエンセ・コミュニティ青少年世界集会（Encontro da Comunidade Juvenil Macaense）が2009年から同じく3年ごとに開催されている。

エンコントロと類似のイベントは1980年代以降、ポルトガルから派遣されるマカオ総督のもとで不定期に実施されていたが、中国特別行政区となったマカオにおいて、この種の会合がマカオ政府の援助を得て実施されるのは大きな意義を持っている。それは、マカオ基本法第42条の「マカオのポルトガル系住民の利益はマカオ特別行政区によって法律の範囲内で保護される。彼らの文化的慣習と伝統は尊重されるべきである」という精神を中国指導のマカオ政府が順守しようとしていることを意味するからである。

2) 2016年エンコントロの内容

2016年11月26日から一週間、第6回マカエンセ・コミュニティ世界集会が開催され、参加者数は過去最多の1543人（うち、マカオ以外からの参加者は892人）であった。筆者はマカエンセ・コミュニティ理事会の母体であるマカオ教育推進協会による招待者という形で初めての参加が叶った。いくつかのプログラムについて報告する。

	日程	スケジュール内容	会場
第1日目	11月26日(土)	18:00 ウェルカム・レセプション	ポルトガル語学校
第2日目	11月27日(日)	10:00 市内観光 (ユネスコ世界遺産歴史市街地区)	シェラトンホテル
		18:30 オープニングセレモニー	
第3日目	11月28日(月)	9:30 マカエンセ・コミュニティ理事会 15:30 集合写真	聖パウロ寺院跡前
		18:00 在マカオポルトガル領事主催晩餐会	ポルトガル領事館
第4日目	11月29日(火)	11:00 マカエンセ海外移民記念碑 表敬訪問 14:30 マカオ大学主催 文化講演会	マカオ大学
第5日目	11月30日(水)	10:00 マカオ国際研究所主催 文化講演会 18:30 マカオ青少年協会主催文化セッション	マカオ科学センター ポルトガル総領事館
第6日目	12月1日(木)	中国・広東省一泊視察旅行 (中央政府駐マカオ連絡弁公室助成)	
第7日目	12月2日(金)	18:00 記念ミサ 20:00 クロージングセレモニー	カテドラル マカオタワー

表2 2016年エンコントロ日程表

マカオ・香港居住者以外の参加者の多くは長時間のフライトを経て香港経由でマカオに到着するため、第一日目のスタートは夜、すでにマカオに到着している参加者を対象に、返還後一校だけ残っているポルトガル語学校を会場にしたウェルカム・レセプションが行なわれ、

マカエンセ伝統料理がビュッフェ形式でふるまわれた。

第2日目には、コタイ地区にある四つ星ホテルの最大収容人数を誇る宴会場でオープニングセレモニーが開催され、約1千人が参加した。崔世安マカオ行政長官を筆頭にマカエンセ・コミュニティのトップと在マカオポルトガル領事、世界各地の県人会代表者が壇上に並び、マカエンセ・コミュニティ理事会会長、マカエンセ立法會議員が英語とポルトガル語でスピーチを行なった。最後に崔行政長官が中国語で祝辞を述べ、華々しい音楽とともに盛大にイベントがスタートした。参加者たちは食事を楽しみながら、終始賑やかな雰囲気で終宴となった。

第4日目には、マカオ大学で文化講演会（使用言語はポルトガル語および英語）が開催された。まず、マカオ特別行政区政府からマカオ特別行政区の17年間の歩みとインフラ整備プロジェクトについて発表が行われた。続いて、バレットポルト大学教授により、20世紀のマカオの古い映像や写真からマカエンセのアイデンティティを探究する研究に関する報告が行われた。次に、ポルトガル人系譜学者フォルジャース氏による『マカエンセ家族系図録』改訂版⁹出版記念講演が行われた。同書は1996年に出版された全3巻・3500ページにわたるマカエンセ440家族の系図録[Forjaz 1996]を20年間かけて改訂したもので、会場から賞賛と感謝の拍手が鳴り響いた。

第5日目には、書籍の出版助成や講演会・展覧会などを組織しているマカオ国際研究所(Instituto Internacional de Macau)主催による文化講演会「ディアスポラのマカエンセの文化的役割—マカエンセであるということ」（O Papel Cultural da Diáspora Macaense – O ser MACAENSE）が開催された。使用言語はポルトガル語および英語で、最初に同研究所所長がマカエンセの存在がマカオにとって必要不可欠であることを強調する基調講演を行ない、次に、中国政府指導のマカオ財団(Macau Foundation)から、マカオの古い写真や映像、オーラル・ヒストリーを集めたインターネットサイトの開設プロジェクトが発表された。

その後、マカオに本部を置くマカエンセ協会(Associação dos Macaenses)が、おもに各県人会を通して行われた世界のマカエンセ435名へのアンケート結果¹⁰を発表した。主な設問は以下の通りであ

⁹ Forjaz, Jorge (2016) *Famílias Macaenses, Volume I, II, III, IV, V*. Macau: Albergue SCM.

¹⁰ Survey sobre a Identidade Macaense(2016), Basto da Silva José, Associação Macaense. インターネット非公開。回答者は総数435名、24の国および地域出身。内訳はマカオ(215

る。

- Q1. マカエンセのアイデンティティを特徴づけるものは何か？（伝統、料理、自意識、言語、コミュニティの一員として認められること、マカオに生活していた期間、マカオ生まれであること、キリスト教徒であることから3つ選択）
- Q2. マカエンセの文化は今後、一般的に広まっていくと思うか？
- Q3. 自分の子供にマカエンセ文化を伝えることが重要だと思うか？
- Q4. 若い世代のマカエンセはマカエンセの文化や伝統に興味関心があると思うか？
- Q5. どのようにマカエンセの文化や遺産を次世代に継承していくことができると思うか？

マカエンセのアイデンティティを特徴づけるものとして、マカオ在住者、海外在住者ともに「伝統」「料理」「マカエンセであるという自意識」が上位に挙がった。

マカエンセ文化が将来的に普及していくか否かという設問に対しては、マカオを含むポルトガル語圏と英語圏で回答の傾向が異なる。いずれも過半数には満たないが、ポルトガル語圏では「思う」派が、英語圏在住者では「思わない」派がそれぞれ半数近くを占める。「わからない」と答えた30%前後の回答者の多くは、「親の世代が子供にマカエンセ文化を伝えようとする努力をするかどうかで異なってくる」とコメントしている。

また、全体の9割以上が「自分の子どもにマカエンセの伝統文化を伝えていくことは重要である」と考えている。しかし実際に、若い世代が同文化に「興味関心があると思う」と答えたのは全体の35%程度（ポルトガル語圏居住者が39%で最も多数）であった。また、「興味関心を持っているとは思わない」も同様に35%程度、「どちらでもない」と無回答の合計が30%程度である。この回答結果から、大多数のマカエンセが伝統文化を次世代に伝えることは重要であると認識して

名）、ポルトガル（89名）、アメリカ合衆国（38名）、オーストラリア（26名）、カナダ（17名）、ブラジル（15名）、イギリス（10名）、中国（6名）、香港（4名）、アンゴラ・スペイン・イタリア・サンマリノ・ドイツ・スイス・スウェーデン・フィンランド・ニュージーランド・日本・タイ・ベトナム・台湾・アフガニスタン・エクアドル（各1名）。

いるものの、実際には若い世代に対する文化継承が積極的に行なわれていないという現状が考察される。

そして、「我々はどのようにマカエンセの文化や遺産を次世代に継承していくことができると思うか？」というオープン・クエスチョンに対し、以下のような回答が得られた。

- ・ 家族のルーツを辿る。本。行事。食べ物。マカオを訪問する。
マカオ内外に住むマカエンセたちと連絡を取り合う。ソーシャルネットワークを用いる。 (ポルトガル、60代女性)
- ・ 回想録や本などを出版し、次世代に伝えていく。
(アメリカ、60代女性)
- ・ マカエンセ世界集会と同様、マカエンセ青少年世界集会を継続させる。
(オーストラリア、60代男性)
- ・ 家族内で子どもたちに口頭で物語や伝統について語り継いでいく。
(ポルトガル、50代 男性)
- ・ 子どもたちをマカエンセ関連協会に入会させ、マカエンセのリーダーたちとの交流を通して、マカオの現状を認識させる。マカオに生きるマカエンセとしての独自性を認識させ、さらにディアスポラのマカエンセとの交流を図らせる。
(マカオ、50代男性)
- ・ 毎日の生活の中で祖父母の思い出や前の世代が伝えてきたことについて語る。
(オーストラリア、40代)
- ・ マカエンセの文化を実践し、ポルトガル語やパトゥア語¹¹を日々話す。
(イタリア、40代)
- ・ 若い世代に積極的にコミュニティ活動に参加させる。自分たちの伝統の意味を教え、過去について語ることで、彼らはマカエンセの文化を認識するようになると思う。
(マカオ、30代女性)
- ・ 親の世代が、まず自文化についてもっと理解する努力をする。
(カナダ、30代女性)
- ・ 若い世代がマカエンセ文化に興味を持たないのは、親の責任だと思う。親が一生懸命文化を伝えようとしなければ子どもたちは自然に興味を持たなくなっていく。だから、常にマカオに対する愛情を忘れず、自分の子供や孫に伝えていくべきだ。(ブラジル、20代女性)

¹¹ 20世紀前半までマカエンセ・コミュニティを中心にマカオ域内で話されていたポルトガル語系クレオール語。現在はユネスコ指定の消滅危機言語に指定されている。

- ・子どもたちに我々の素晴らしい遺産について教える。ポルトガル語と広東語を同時に教える。子どもをポルトガルに連れて行く。マカエンセ料理を作る。マカエンセ文化の持つポルトガル的な、そして中国的な面を両方教え、マカエンセ文化の理解を深めさせる。

(マカオ、20代女性)

- ・マカオの多文化共生を真に理解しているのはマカエンセしかない。その意味で、我々はマカオのリアルな伝統を彼らに教えようとしなくてはならない。

(マカオ、20代男性)

以上のようなアンケート結果から、マカエンセ協会担当者は、マカエンセとしてのエスニック・アイデンティティを持つ若い世代が減少している現状と、国や地域、世代を超えたコミュニティの連結が必要であることを訴えた。

その後、中国と世界のポルトガル語圏（特にアンゴラ、ブラジル）との経済協力の連携地点としてマカオが重要な役割を果たしていることを強調したミン・チャンスタンフォード大学教授の講演、マカエンセのエスニシティに関連する活動や書籍に対して贈られるアイデンティティ賞授与式が行われた。

同日夜には、マカエンセ青少年協会(*Associação dos Jovens Macaenses*)主催のイベントが行われ、マカオ内外から約 50 名が参加し、自主制作ビデオが上映されたのち、参加者同士の交流が行われた。アルヴェス同協会会長は「マカオ特別行政区は、マカオを他の中国のどの都市とも異なる街にするために、マカエンセのアイデンティティと文化を必要としている」と述べ¹²、マカオが中国と世界のポルトガル語圏を仲介する重要な立場にあることから、ポルトガル語と中国語に堪能であり、双方の文化に通じているマカエンセがマカオの発展に欠かせないものであると強調し、将来的に世界の県人会とエンコントロの中心となる若い世代への積極的な参加を呼びかけた。

最終日の夜には、マカオ半島の南端にそびえるマカオタワーでクロージングセレモニーが開催された。マカエンセ・コミュニティ理事会会長、マカオ観光局長によるスピーチの後、会がスタートし、旧友た

¹² Macau Daily Times (2016 年 12 月 1 日) *Gathering of the Macanese Communities / AJM calls on young Macanese in diaspora to have more active role.*

ちと別れを惜しみ再会を誓う参加者の姿が多く見られた。

3) エンコントロ終了後の総括

一週間にわたるプログラム終了後、返還前最後のマカオ政庁長官（マカオ市長）であったサーレス・マルケスマカエンセ・コミュニティ理事会会長はポルトガル語新聞のインタビューに答え 2016 年エンコントロの総括を述べた¹³。同会長は、世界中から集まった参加者同士の交流が図られたことはもちろん、会期内に開催された文化講演会に多くのマカエンセが積極的に参加し活発な意見交換が行われたことや、マカエンセ青少年協会主催による若い世代を対象としたセッションも盛況であったことから、相対的に非常にポジティブな結果が得られた一週間であったと語った。特に今回初めての試みとして実施した一泊の広東視察旅行により、ディアスポラの参加者が急速な工業発展を遂げている中国広東地方の現状を理解するとともに、マカオが含まれる広東文化圏の歴史を再認識できたことは非常に有意義であり、ディアスポラの若い世代に伝えるためにも今後のエンコントロでも継続すべき企画であると強調した。そして、今回のエンコントロの目的であった「ディアスポラのマカエンセが自らの起源となる地を再訪し、家族や友人らと旧交を温める機会を得ること」「参加者全員が急速に発展しつつあるマカオの現状を理解し、マカオの未来について考えること」が実現化されたことにより、マカオを含む珠江デルタ地域についての理解が進んでいくだろうと述べた。最後に、今後もディアスポラのマカエンセとの対話の場を設け、世界のマカエンセ県人会とより強いネットワークと相互協力体制を結ぶことが重要であるとしめくくった。

また、別の特集記事では、エンコントロの参加者に対するインタビューが紹介された。以下、その一部を引用する。¹⁴

- 祖父母がマカオ生まれで、両親は香港生まれ、そして自分はカナダ生まれ。マカオに来たのはもう 5 回目だが、来るたびにマカオの歴史や、祖先や、自分のルーツである文化との新たな接触があり、面白く感じる。エンコントロでは信じられないほど多くのことを学

¹³ Jornal Tribuna de Macau(2016 年 12 月 5 日)*Encontro não é o Princípio e o Fim de Tudo*.

¹⁴ Jornal Tribuna de Macau (2016 年 12 月 1 日) *Orgulho Macaense mesmo à distância*.

べる。来るたびに友達になった人たちと、新しい出会いもある。だから、もっと多くの若い世代に参加して欲しいと思う。実は、欧米で育ったマカエンセの自分は、言葉も文化も違うマカオに溶け込むことは難しい。それでも自分のアイデンティティは 100%マカエンセだ。(20 代男性)

- ニューヨーク生まれ。父はマカエンセ、母は中国人。マカオに来たのは 2 回目で、エンコントロに参加したのは今回が初めて。他のマカエンセの人たちと知り合うことができ、自分のルーツや文化的遺産についてより多く知ることができた。私はマカエンセであることを誇りに思っている。この文化的遺産を維持していくのは難しいかもしれないけれど、こうしてマカオで皆が一堂に会する、それだけで何かが違ってくると思う。(20 代女性)¹⁵

5. おわりに—エンコントロの分析と考察

今回、三年に一度しか行われないマカエンセ世界集会に実際に参加し、世界各地に暮らすディアスポラのマカエンセたちと交流することができた体験は、今後の研究における新しいフィールド開拓の出発点に立ったという意味で大きな成果であった。しかし今回のフィールドワークでは個人的な聞き取り調査を実施することは叶わなかった。そのため、現時点で具体的な事例を基にマカエンセのエスニシティの現状について多角的な視点から分析を行なうことはできないが、2016 年度エンコントロで実施されたプログラムや、参加者と交わした会話の内容、マスコミの反応などから考察し、本稿の結びとしたい。

返還後、「マカエンセとしての必要条件」と考えられていたエスニック・アイデンティティが次々と消失していく中で、とくにマカオ在住のマカエンセ・コミュニティは大きな危機感を感じ、「ポルトガル人子孫」というエスニック・アイデンティティから離れた別のエスニシティの構築を求められている。それはすなわち、あえてポルトガルに限定することなく、「四世紀以上前から西洋と東洋の文化の接点となり、多文化共生が継続されてきたマカオと言う土地の出身である、

¹⁵ Jornal Tribuna de Macau (2016 年 12 月 1 日) *Orgulho Macaense mesmo à distância*.

多様な血と混合文化・伝統を受け継ぐ人々」というエスニック・グループとしてコミュニティを存続させようという方向性である。別の表現をすれば、マカオを故郷とし、マカオに対する「愛国心」を精神的支柱として、東西折衷文化である独自の料理やクレオール語を守りながらコミュニティを維持していくという未来像を想起しているように感じられる。

実は、中国特別行政区となって17年が経過し、急速なスピードで中国化・中国人化している今日のマカオにおいて、ポルトガルの痕跡は「意識的に」消されつつある。たとえば2005年、かつてのポルトガル人居住区を中心としたマカオ半島のわずか数平方キロメートルの地域内にある22の建造物と8か所の広場、計30か所が「マカオ歴史市街地区」としてユネスコ世界文化遺産に制定され、そのうち23か所はポルトガル関連の歴史建造物である。しかし、マカオ観光局をはじめとするマカオ政府によって発行された印刷物には「ポルトガル」という具体的な文字は見当たらず、「西洋と東洋が出会った街」といった抽象的な表現に言い換えられている。

また、2016年エンコントロの主賓としてオープニングセレモニーに招かれた崔世安行政長官のメッセージの中でも、マカエンセは「多文化が共生するマカオという街を形成するために重要な役割を果たしてきた、ユニークな人々」と語られ、「ポルトガル人の子孫」という表現はされていない。そのうえで崔行政長官は、マカエンセの宗教や文化伝統、言語といった「従来のエスニシティ」の独自性を強調し、とくに世界から観光客を惹きつける街であるマカオのアイデンティティを形成する重要なアイコンのひとつとしてマカエンセの伝統料理を挙げている。それに歩調を合わせるように、マカエンセ・コミュニティ理事会会長や理事によるポルトガル語のメッセージにも「ポルトガル」という語は見当たらない¹⁶。

ポルトガルとの絆や結びつきをあえて消し去っていかうという意図は、マカエンセ・コミュニティ理事会会長によるエンコントロのプログラム総括にも明確に示されている。マカオを多様な文化が交差した結果誕生し、発展してきた広東文化圏のひとつの特別な街としてとら

¹⁶ Encontro das Comunidade Macaenses Macau'16 プログラムブック記載のメッセージ。

え、こうしたマカオの現状をディアスポラのマカエンセの次世代の若者たちに伝えていく重要性があるというメッセージからは、マカオが中国の一部であることを素直に認めるような態度が読み取れる。

しかし同時に、マカオ在住のマカエンセは、自分たちというエスニック・マイノリティの存在があるからこそ「中国マカオ」のオリジナリティがあるという自身の「存在価値」をよく理解し、中国政府の思惑を巧みに利用して生き残ろうとしているとも言える。社会の変容とともに自らのエスニシティも柔軟に変容させていく、その生き方こそが、マカオ社会で生き残るためにマカエンセが取ろうとしている選択なのであろうと考える。

いっぽう、ディアスポラのマカエンセのエスニシティ変容に目を向けてみよう。マカオ社会の中ではポルトガル人の子孫であることを最重要のエスニック・アイデンティティとして生きてきたマカエンセは、海外では中国人的な風貌から「ポルトガル人」すなわちヨーロッパ人とみなされず、また「マカエンセ」（英語ではマカニーズ Macanese）と言っても理解されないため、とくに2世以降はその国の国籍を持つ中国人（華人）としてみなされる。とはいえディアスポラの全体的な傾向として、自らを「中国人である」と意識している者は多くない。別の言い方をすれば、彼らにとって、「自分たちは中国人ではなく、あくまで西欧的な出自とアイデンティティを持つ人間」であり、そのエスニシティを守っていくべきであるという感情や期待感が、マカエンセ協会によるアンケート結果やインタビューから感じられる。その上で、ポルトガル的なエスニック・アイデンティティを維持し続けているかという観点でポルトガル語圏と英語圏在住者を比較すると、前者は言語の関係から維持し続ける者が多いが、後者には上海や香港への移民を経てそれらの国や地域に移住した英語を母語とする家族が多いため、大多数が維持していないという違いは存在する。

今後もマカオ在住のマカエンセのみならず、ディアスポラのマカエンセたちとのコンタクトを維持し、実際に各地を訪問しフィールドワークを行なうという長期的目標を掲げ、引き続きマカエンセのエスニシティの現状を研究していきたい。

【引用・参考文献】

- 東光博英（1998）『マカオの歴史－南蛮の光と影』大修館書店。
- 塩出浩和（1999）『可能性としてのマカオ』亜紀書房。
- 内藤理佳(2014)『ポルトガルがマカオに残した記憶と遺産―「マカエ
ンセ」という人々』上智出版。
- Amaro, Ana Maria (1994) “Sons and daughters of the soil”, *Review of Culture*,
No.20 (2nd series) July/September 1994 English Edition,13-67. (Revised
reprint from: *Filhos da Terra*, Macau, Instituto Cultural de Macau, 1988)
- Andrade de Sá, Luís (1999) *The Boys from Macau – Portuguese em Hong
Kong*: Macau: Fundação Oriente and Instituto Cultural de Macau.
- Cabral João Pina and Lourenço Nelson (1993) *Em Terra de Tufões –
Dinâmicas da Etnicidade Macaense*, Macau: Instituto Cultural de Macau,
21-22.
- Fernandes, Moisés S.(2006) *Macau na Política Externa Chinesa 1949 -1979*:
Macau: Imprensa de Ciências Sociais.
- Forjaz, Jorge (1996) *Famílias Macaenses, Volme I, II, III*. Macau: Fundação
Oriente.
- Silva, António M.Pacheco Jorge da (2010) *The Portuguese community in Hong
Kong:a pictorial history Volume II*: Macau: Conselho das Comunidades
and Instituto Internacional Macau.
- Silva, António M.Pacheco Jorge da (2012) *The Portuguese community in
Shanghai:a pictorial history*: Macau: Conselho das Comunidades and
Instituto Internacional Macau.
- Silva, António M.Pacheco Jorge da (2015) *Macaenses - The Portuguese in
China*: Macau: International Institute of Macau.
- Silva, Frediric Jim(2013) *Reminiscences of a Wartime Refugee: Mosaico
Volume XXVII*. Macau: Instituto Internacional de Macau.
- Teixeira, Manuel (1965) *Os Macaenses*, Macau: Impresna Nacional.

A situação atual da etnicidade dos descendentes
de portugueses em Macau (os macaenses)
– um relatório sobre o Encontro das Comunidades Macaenses
realizado em 2016 –

Rika Naito

Os portugueses começaram a residir em Macau a partir de meados do século XVI e, como forma de assegurar a administração da região territorializada, os administradores encorajaram o casamento entre portugueses e os habitantes da região. Assim nasceram os macaenses que criaram a sua identidade étnica como “descendentes de portugueses” e que formaram a comunidade macaense que sobrevive já há mais de quatro séculos. Contudo, os elos que unem esta comunidade estão a ficar cada vez mais fragilizados devido à diáspora, como consequência das alterações do sistema político em Portugal e na China no século XX, e à forte onda de “chinesização” que continua a aumentar desde a transferência de poderes à China em 1999. Está a ser levado a cabo desde 2001 uma iniciativa denominada “Encontro das Comunidades Macaenses” cujo objetivo é reunir a cada três anos os macaenses dispersos pelo mundo afora e promover a identidade macaense. Tendo como base o relatório do último encontro realizado em novembro de 2016, apresento a história da diáspora dos macaenses e tento refletir sobre a atual situação da etnicidade dos macaenses.